



呑むか呑まれるか

会員 高畠 敏秀 (40 期)



中学か高校の頃だったと思う。ウイスキーのTVCMで、「ボトル1本呑めなければ男じゃない」というコピーがあった。私はまだ酒を呑む歳ではなかったので、「ふーん、そんなものか」と思っていた。ところが、そのCMを見ていた私の亡父は、「あれ？ 普通ボトル2本くらい呑むだろう」と私の顔を見て言う。それがずっと私のトラウマになっているのであろう。

そのトラウマを払拭するためか、私も学生時代から浴びるように呑んだ。救急車には何度も乗ったが、不思議とパトカーには乗らなかった。酒癖が悪くない証拠である。司法試験受験時代は金も時間もなく、殆ど呑まなかったため、再び少年のような健康状態に戻り、合格してからまた浸かった。研修所では、医務室に呼び出され、「キミ、酒を止めないと早く死ぬよ」と注意された。

それでも決して懲りることはない。弁護士になってからも各種会合に参加した後、真っ直ぐ帰ることはまずない。必ず最後まで残ってしまう。金額にすればおそらく優にランボルギーニ数台分は呑んだであろう。失った時間は、インフィニティである。

それでもやはり飽きることはない。ただし最近では、翌日の夕方まで酒が残ることが多く、二日酔いのまま呑むと、酒が不味いため、3日に1度くらいのペースにしている。そうでないと「酒好き」がただの「アル中」になってしまう。

なぜそこまでして呑むのか、と問われれば、「酔って本音で話すのが好き」ということに尽きるであろう。若い頃は、先輩弁護士から「本音」で事件処理の仕方

や依頼者への対応方法、費用請求のコツ等をよく聞かせていただいたし、自分が経験を積んでからは、僭越ながら後輩にそのような話をするようになった。本を読んでも判らないことや、どうしても本に載せられないようなこと、文章化できないことは多くあり、それらの点はやはり「本音」を直接聞かねばならないであろう。そういう意味では、若手の弁護士にとっても、先輩と呑む機会があれば、「参加することに意義がある」と思われる。私のようなベテラン（自分では若手の少し上と思っているが）にとっても、若い弁護士から「本音」を聞いて参考になることは数多い。

スウェーデン人の友人（私の英会話の先生）とよく呑むことがある。彼と出会ってから4年以上になるが、私よりも二十数歳若く、お互い第二言語であるのに、英語で議論をすると全く勝てない。当初は酒の量でも負けており、「白人は酒も強いし、頭も良いのかもしれない」と劣等感を抱いたものであるが、彼も結婚して子どももでき、健康に気を遣うようになったためか、少なくとも酒の量では負けなくなった。当たり前かもしれないが、世界情勢の見方が全く異なり、勉強になることは数知れない。日本の識者にはスウェーデンを社会福祉国家の見本として高く評価をする人が多いが、彼に言わせると「日本の方がずっと暮らしやすい」とのことである。税金が恐ろしく高いこと（個人の稼ぎの60%以上持っていかれる。法人税は安い）や、中東やアフリカからの移民を多く受け入れたことによる治安や財政の悪化が問題である、というのである。

ともあれ、酒を呑んで語ることは楽しいことである。